不退転
第 38 号
校長 久高利美子

「人々が生活しやすい社会を」

「第三九回全国中学生人権作文コンテスト」沖縄県大会において、本校三年李英龍さんが最優秀賞に選ばれました。おめでとうございます。（意見文を紹介します。）

「みんな同じ世界で生きているのにどうして・・・・・・」

私が強い疑問を持ったのは、父と母と私の三人で訪れた米軍基地のイベントでの出来事からだった。その日は父にとって久しぶりの休日で、父はイベントに行くことをとても楽しみにしていた。入り口の前には数え切れないほどの人が並んでいて、「身分証明書をお出しください。」と書かれた看板が立てられていた。入り口で私と母は身分証明書を出し、父は所持していたパスポートを出した。その瞬間、それを受け取った係の表情がいきなり険しくなった。「中国の方ですか。」「主人は中国国籍で、私と息子は日本国籍です。」母が答えた。「今、国際的な関係で中国人を基地の中に入れることはできません。」「じゃあ私はいいから、妻と息子を入れてください。」父が怒り気味に言った。すると、係の人はこう言った。「日本国籍でも、中国の方と結婚されていますし、『李』という苗字もついている。もしかしたら、この二人も中国に関わるスパイの可能性もあるんですよ。」

当時は貿易摩擦が原因で、アメリカと中国の関係が悪化していた。そのことはニュースで見て何となく知っていた。それを考えると、中国国籍の人が基地に入れないことは「国際問題だからしょうがないのかな」とも思った。しかし、私たちは毎日普通に生活しているだけでその問題とは何も関係がない。その上、私と母は日本国籍なのに「李」という苗字がついているだけで「スパイなのではないか」と偏見をもたれた。私たちにとってそれは、差別的な行為だと感じた。

私が中国人への偏見に疑問を持ったのはこのときだけではない。父の家族が一ヶ月ほど沖縄旅行するということで、その期間だけ滞在するアパートを探していた時のことだ。連絡をした会社の方が、「中国の人達ですよね。迷惑がかからないようにお願いします」と話したのだという。ここでも「中国人は、声が大きくてうるさいから迷惑がかかる」という偏見があるように私は感じた。確かに、店などで中国の人達の横を通ると、うるさくて迷惑だなあと感じることはある。会社の方もきっとそういうことを経験したのだろう。でも、実際に部屋を借りる人達に会ったわけではないのに「中国人は声が大きくて迷惑をかける」と決めつけられたことが嫌だった。中国人全員がそうではないのにと思った。私は「中国人の声が大きい理由」を父に聞いたことがある。父が言うには「中国人は相手に物事をはっきりと伝えるために、大きめの声でしゃべる」のだそうだ。だから迷惑をかけていいというわけではないが、その理由を知るだけで、私は少し納得することができた。少しでもその人達の文化を知ろうとすることも、相手を受け入れるためには大切なことだと思う。

平成二九年に内閣府が行った「人権擁護に関する世論調査」では、「風習や習慣の違いで、外国人は受け入れられない」という声が非常に多かった。このような、人権問題が起きていることは多くの人が気づいているが、この問題は解決されていない。世界人権宣言によると、人間はあらゆる要因で差別されないことを保障されている。それなのに外国人に対する差別は実際に起こっているし、それによって嫌な思いをすることもある。

「人と人が認め合い、分かり合えば、このようなことは起こらない」と私は思う。でも、人と人が分かり合うにはどうすればいいのか。私の母が父と結婚した理由についてこう語ったことがある。「私がお父さんをパートナーとして選んだのはね『中国人』だからじゃなくて、その『人』が好きだったからなんだよ。」私はその言葉を聞いてとても感動した。母は中国人という大きなくくりで父を見たのではなく、その人をしっかり見て結婚を決めたと分かったからだ。私も母を見習い「〇〇人」だからと偏見を持たずに、その人達一人一人を見るようにしたい。私たち一人一人全ての人がその考えを持てば、信頼が生まれ、人を尊重できるようになるはずだ。決めつけられて嫌な思いをする人も減る。みんな同じ人として考えられるようになる。そして何より、様々な個性を持った人でもいきやすい世界になるのではないかと私は思う。